

イギリス・フランスを訪ねて

月 瀧 藤井 道子



13時間程の長いフライトの末、悪天候の中、無事ヒースロー空港に到着しました。

2日目は、ロンドン市内にあるプレイブルック老人ホームを訪ねました。ここは40年前に84名でスタートし、現在は65歳以上の方が、42名いるそうです。1ユニット6~8人で6ユニットあり、小グループに分けることにより、毎日の生活の質を向上するように努めているということです。入居者は、心臓発作、脳卒中、老人性痴呆症・アルツハイマー、知的障害者などの方です。朝食、夕食は、キッチンでサンドイッチなどの料理を作り、昼食は、区の方から届けられます。部屋は、個室で8帖くらいの広さにベッドや洗面台、タンスなどがありました。室内の様態替えも良いそうです。あいている時間は、リビングでテレビを見たり、のんびり過ごしたり、みんなで音楽を楽しんだりします。これからは、クリスマスの特別劇をするので練習をするそうです。希に入居者どうしの口喧嘩も起こるみたいです。又、スタッフと一緒に週2回の外出や、2週に1回映画を見に行きます。そして、年2回大きなパーティーを行ない、友達や家族といっしょに楽しく過ごしているということです。とても穏やかで、アットホームな感じを受けました。

3日目は、ロンドン市内にある公立エルサム英国国教会小学校を訪ねました。この学校は、日本の小学校に当たるプライマリースクールで、5~11歳の子供達が、親の送迎で通っています。運営は、牧師など14名の理事の方が主体となっており、入学は教会に来る方の子供が優先となっているようですが、他宗教の子供も入学しています。学費は無料ですが、子供1人につき年25ポンドを預り、積立金にして建物の修理などに当てます。先生の給与、学校の備品などは、自治体から支給されています。子供達は、8時55分に登校し、昼食はお弁当持参で、3時30分に下校します。日本のようなクラブ活動はありません。授業中の子供達は、和やかに算数や歴史の勉強をしていました。しかし、休み時間になると元気いっぱい校庭で、にぎやかに遊んでいたのが印象的でした。

4日目は、移動日でロンドン発のユーロスターに乗車し、3時間でパリに到着しました。午後からは、ノートルダム寺院を見学し、パリ市内を巡りながらホテルへと向かいました。

5日目はパリ近郊、セーヌ・エ・マルヌ県の農家を訪ねました。主人のシャテ氏は、息子さんと2人で、220haの耕作地に小麦、とうもろこし、グリンピース、菜種等の栽培をしているそうです。合理的農業を目指す、環境保全のための実験的農家でもあるということです。土壌検査を4年に1回、毎年1~2月末に肥料の残料検査をしています。農作物に合わせて肥料をまき、高品質の物を生産し、農協に出荷しているそうです。又、野菜だけでなく、フォアグラなども直接販売して、観光客を集めるようにしています。しかし、販売する場合は、餌が80%以上農家で作られたものでなければならず、農業試験場の検査を受け、少ししか認可がありません。ベッドアンドブレイクファーストといって、宿泊と朝食、農業体験を組んだ民宿もしているということでした。2年前から、パン屋がなくなって、奥さんが焼くようになったそうですが、最後に焼きたてケーキを、おいしくいただいて次の目的地へ向かいました。その後、農園レストランにて、収穫された食材を使った昼食をいただきました。午後から、セーヌ・エ・マルヌ県観光会館において、マネージャーからグリーンツーリズムに関する説明を受けました。グリーンという色は、自然や緑を表し、これを生かした事業です。ここには、森や川、フォンテーヌブロー城、ディズニーランドなどがあり、観光客にとって憩いの場所でもあります。そこで、農家の使わなくなった建物を改造し、週末や週単位で貸別荘にします。家族は、ホテルより安く泊まることのできるの、年2~3回利用することになります。こうして、多くの観光客が訪れることで、地域の活性化を図ります。今では、フランス96県中、第2位の大成功を納めているということでした。その後、近くのフォンテーヌブロー城で、記念写真に納まり、パリに戻りました。

6日目は、待望のルーブル美術館の見学です。12世紀末の建物で、その後、歴代の国王によって増改築され、1793年に中央美術館として誕生しました。ガラス張りの「モナ・リザ」・「ミロのヴィーナス」・「サモトラケのニケ」など本物を目の前にして、感動の連続でした。その後、夕方の飛行機で帰国の途につきました。あっという間の1週間でしたが、この研修で、多くの事を体験し、学ぶ事ができて感謝の気持ちでいっぱいです。



▲小学校高学年の授業風景

ロンドン・パリを訪ねて HELLO・BONJOUR & ありがとう

月 瀧 関根 万知



10月29日:成田発JAL403便にて、ロンドンへ向けて離陸。約12時間位でロンドン(人口約700万人)のヒースロー空港に到着。雨、強風のため少し揺れたが、まずは無事に到着して、一安心。時差が日本時間-9時間である。飛行中、JALのステューデスさんと色々話ができ、ロンドン&パリ情報をゲット。とっても、キュートな人であった。

10月30日:ロンドンー福祉施設視察(プレイブルックという老人ホーム訪問)
高齢化という社会問題は先進国共通の問題であり、イギリスでも2020年には65歳以上の高齢者の比率が全人口の約2割まで増加する見込みとのこと。このため、各種の介護サービスの改善が急務である。このホームは40年前にできて、その当時の入居者は84名。現在42名で40名の職員で構成され、そのほとんどの人がケア・ワーカーの資格を持つ。入居の年は、65歳以上であること。このホームの平均年齢は、85歳である。いくつかのユニットに分かれていて、ユニットは6~7名位である。職員は、ユニットに対して各々チーム管轄になっている。ユニットには、名前も番号もなく普通の家らしく過ごせるように、自分の使っていた物を持ってきている。壁には、好きな絵や写真を飾り、テレビ、タンスなどもあった。まさに、自分の部屋の様である。家族とのコミュニケーションは可能な限り接触を図り、ホームの中に犬もいて、とても自由な感じであった。

10月31日:ロンドンー教育施設視察(公立小学校 エルサム英国国教会小学校)
イギリスの義務教育は5~16歳までで、5~11歳までの小学校と11~16歳までの中等学校に分かれる。80%の生徒が、その後教育を続け、大学進学を前提としたシクスフォームと呼ばれる学校が、農業・商業・技術系のカレッジで学ぶ。私達は、ロンドン市グリニッジ区にある公立の小学校を訪問した。ウイットニー校長先生より、説明を受ける。ここは宗教が主体の学校で、宗教の時間もある。学校には運営理事会があって、ここでは牧師が当たっている。5歳になったら入学ができ、年に1月・5月・9月と3回ある。その後、この生徒さんの案内で、授業を見せてもらった。6クラス位回ったが、テーブルを囲んだり、前につめて座っていたり、色々であった。子供達は皆可愛く、カメラをむけるとポーズをとってくれた。最後の質疑応答では、いじめはありますか?全然いじめがないとはいえない。いじめがあると、すぐ親が学校に来て相談して対処している。登校拒否の子はいますか?小学校にはいないが、中学校ではやはりいる。生徒に対して一番大切に思っている事は?全力を尽くす。協調性を持たせ、各々の生徒の能力を認め、個性をのびさせていく。教師に対しては?チームワーク・能力の有る方、親と生徒に対してコミュニケーションを持てる方を望む。このような答が、返ってきた。

11月1日:ユーロスターにて、パリへ移動。全然揺れずに、快適な3時間で北駅に着く。

11月2日:パリー農業関連視察(パリ近郊セーヌ・エ・マルヌ県での農業・グリーンツーリズムを視察)
グリーンツーリズムとは、都市部から観光客を呼び、とれたての食材を使った料理をふるまい、収穫作業体験してもらうことで収入を得て地域の活性化を図るもので、農業国フランスでは各地盛んになってきている。多角経営農家シャテさんの家を訪ねた。試験的に新しい技術を取り入れ、品質を重んじ、合理的な農業をめざしている農家であった。その後、農園レストランでそこで作った食材を使った昼食。午後からは、観光会館のマネージャーより、グリーンツーリズム・フランス農業に関する講義を受ける。81%の人が都市部(パリ)に住んでいるフランスは、まさにグリーンツーリズムというビジネスが成立するのである。

11月3日:午前/ルーブル美術館見学。気が遠くなるほど多くの作品を所蔵する宮殿美術館「ルーブル」には、あらゆる発見と驚きがあった。

午後/数々の出会い(ステューデスさん、同室の阿部さん、添乗員の北川さん、個性的なガイドさん、バスの運転手さん、小学校の子供達、シャテさん)と、体験(ロンドンのスーパーに行った、地下鉄・タクシーに乗った。エッフェル塔・凱旋門に登った。ブローニュの森を歩いた。パリのカフェでお茶を飲んだ。...)を残してくれた「ロンドン」・「パリ」の街を心に焼きつけて、雨のシャルルド・ゴール空港より、帰国の途に着いた。今世紀の終りに、海外研修旅行に参加できた事を喜び、そして、お世話になった皆様に深く感謝致します。「ありがとう」



▲シャンゼリゼ通り

●こぼれ話●
パリ2日目の夜、光り輝くエッフェル塔を見に行っただのに、故障で見れなくて、とっつても残念でした。

●こぼれ話●
エレベーター故障のため、汗して螺旋階段を登った凱旋門。その門上からのパリの景観は見事。ワンタフル!